

国
(問題)
語

2014年度

〈2014 H26081119〉

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
 - 2 問題は2～8ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
 - 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
 - 4 マーク解答用紙記入上の注意
- (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
- (2) マーク欄にははっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

- 5 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 6 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
- 7 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

どんな建物をつくりたいか、それを言葉にするのは、難しい。それでもそれを無理やりにいえば、「眼の前にある世界は、実はそう見えている世界ではなく、別の世界なんだ」というような感覚をもった物理的環境、ということになるだろうか。

もちろん、現実世界の、そのずっと向こうに別の理想世界がある、というのではない。そうではなく、眼の前にある現実世界そのもののなかに、あるいはそのすぐ裏側に、別の世界がある、という感覚のことだ。もともと、ある特定の世界に辿り着くこと自体が目的なのかといえ、そうでもない。もうひとつの世界は、極端にいえば、どんな世界であつてもいい。大切なのは、一見、挺子でも動かないようなこの現実世界が、実は、そう見えるほどには盤石ではないんだ、と感じられるその瞬間である。現実の

甲

、押しつぶされそうになっているなかで、「なんだ、そのすぐ裏には別の世界があるんじゃないか」と救われる瞬間、いわば現実世界が相対化される瞬間を持つこと。

よくにそういう建築がつかれるかどうかは措くとして、少なくともよくにとつて、すばらしい建築とは、そんな瞬間が持続して感じられる場のことだ。千利休の「待庵」、リュベトキンのロンドン動物園「ペンギンプール」、ル・コルビュジエの「ラ・トゥーレット修道院」などなど。世界には、そんな建築が、いっぱいある。

こういう建築観を持っているせいだと思ふのだけれど、建物ができあがつて困ることのひとつは写真の撮影だ。うまく写らない。最初は、写真家の腕を訝つていた。でもそれが度重なるにつれ、どうもそういうことではないことがわかつてきた。そもそも、建築写真が想定している「建築」が、よくのそれとはかなり違う。そこに原因があることがわかってきた。

建築には、大雑バにいつて、人間の視点と神の視点がある。建築を訪ね、その空間を経験するときに見たり感じたりする、その視点が人間の視点だ。人間はしかし、それ以上に、見えたものを頭のなかで総合して、実際には見えていないものを「見る」ことができる。たとえば、建築全体の組織構成は、(鳥のように空を飛べるとそれに近いものは見ることができるけれど) 実際には見えない。でも、ある程度の建築的トレーニングを積めば、それを頭のなかで組み立て、理解できるようになる。こういう建築全体の組織構成とか平面図を見る視点が、神の視点だ。構造システムも、神の視点に立つてはじめて見えるもののひとつである。すべての構造体が露出しているわけでないから人間の視点では見えない、ということだけではない。構造システムも、建築全体の組織構成と同じように、一望に見渡すことができないのに、そこにあると感得されるものだ。だから、それを「見る」には、神の視点に立つことが必要になる。

別の言い方をすれば、人間の視点とはほぼ「具体」であり、神の視点は、つまり「抽象」である。どんな事物にも、その大きさとか、そのかたちとか、その色とか、いろいろな相がある。それらの相が分ちがたく重なっている。具体とは、そういう相の重なりを省略しないでそのまま捉えることだ。それに対して、抽象とは、その重なりの中から「この相こそがその事物の本質である」として、ある特定の相だけをとりだすことである。

①

、抽象は現実

ではない。眼には見えない。頭のなかにしかない。

どんな事物についてもいえることだけれど、建築はきわだって、こういう

乙

にある。そして、モダニ

ズムの建築には、このふたつを徹底的に接近させようとする強い意思があった。訪ねていつて、すぐにその組織構成や構造システムがわかる建築がある。その一方で、それら抽象がよくわからない建築がある。モダニズム的な考え方は、すぐにわかる建築を傑作といい、よくわからない建築を駄作という。つまり、見てすぐにその建築の本質が理解できなくてはいけない。逆にいえば、その本質がすぐに見てとれるように建築はつくられなければならない。つまり、本来は

神の視点ではじめて見えるものが、人間の視点から見えないなければならない。

そのために、モダニズムの建築は、具体を抽象に接近させようとし、それがほとんど自己目的になって進化し洗練されてきた、とほくは訝っている。表向きには、たとえば機能性向上のために、ある組織構成が選択されたことになっている。あるいは、構造力学的合理性に基づいて、ある構造システムが採用されたことになっている。たしかに、それは嘘ではない。

②

、もしそれが見る人にその建築の本質として感得されなければ、それらはきつと採用されなかったということも、同じくらいにたしかなことなのだ。

こういうなかで、建築と写真は協力しあつて、具体を抽象に接近させようとしてきたといえよう。写真は、基本的には、人間の視点で撮られる。だから、写真は本来的には具体に向かいあつてい

はなく、抽象として建築を写そうと努めてきた。建築写真は、眼の前で繰り広げられている、かたちの世界、色の世界、テクスチャの世界、光と影の世界が重なり合う情景ではなく、その裏側に存在しているはずの本質をなんとかえぐりだそうとしてきたのだ。

建築でしっかりと具体を抽象に接近させてあれば、写真でその抽象をうまく撮ることができる。その建築の本質を、たった一枚の写真に定着した、つまり決定的なショットを撮ることができる。モダニズムの建築においては、そんな決定的な写真が撮れる建築が、つまりは、すぐれた建築なのである。

⁶ ぼくのところでつくる建築には、本質というものがない。組織構成や構造システムがないというのではない。それらはもちろん存在しているし、それらのあり方にとっても気をつかう。でも、それらが感得されようとは、していない。見えなくていいし、わからなくていい。というのも、いま眼に見えている情景そのもの、あるいはそれが堅固なものではなく、いつでもコワれてしまうような相対的なものであるということが主題だからだ。眼の前にある世界がひとつの固定化された意味に収斂^{しゅうれん}していくのをとめたいと思う。意味を流動化させる、

丙

させる、脱臼させる。眼

の前の情景のずつと奥に、本質が控えているのではない。

ぼくのところで、今までのところ、そういう主題が一番発^Cキされたのが「青森県立美術館」だ。

(青木淳の文章による)

(注) リュベトキン……主にイギリスで活躍した建築家

ル・コルビュジエ……主にフランスで活躍した建築家

問一 傍線部A、Cにあたる漢字を含むものを、それぞれイ、ホの中から選び、その解答欄にマークせよ。

傍線部A	イ	ハ握	口	ハ閥	ハ	寒パ	二	制ハ	ホ	論バ
傍線部B	イ	ホウ御	口	転トウ	ハ	カツ愛	二	カイ滅	ホ	故シヨウ
傍線部C	イ	キ然	口	キ概	ハ	禁キ	二	分キ点	ホ	キ発油

問二 空欄

①

②

ら選び、その解答欄にマークせよ。
に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次のイ、ホの中から

イ	①	しかし	②	つまり
口	①	ゆえに	②	すなわち
ハ	①	だから	②	しかし
二	①	ところで	②	だが
ホ	①	そのうえ	②	とりもおさず
ヘ	①	したがって	②	ところで

問三 傍線部「一見、梃子でも動かないようなこの現実世界が、実は、そう見えるほどには盤石ではないんだ」とあるが、どういうことか。それを説明している最も適切なものを、次のイ、ホの中から選び、その解答欄にマークせよ。

イ 現実世界は人間によって認識される客観的事実の集合体であると考えられがちであるが、実際には固定的なものではなく、絶対的な存在ではない、ということ。

口 現実世界は誰の眼にも明らかな事実の複合体であって、変更しがたいものだと考えられがちであるが、実際には人間によって解体と再構築が繰り返されている、ということ。

ハ 現実世界は動かしがたい事実の積み重ねであって、制約が多いと考えられがちであるが、実際には建築家が自由に活動することを許す柔軟な構造をもっている、ということ。

二 現実世界は眼に見える物体の連続からなると考えられがちであるが、実際には人間には見えない世界と表裏一体の関係にあり、不可思議でとらえどころがない、ということ。

ホ 現実世界は個々人のイメージの最大公約数であって、窮屈だと考えられがちであるが、実際には発展的であり、昔の人間には想像不能な建築様式も許容している、ということ。

問四 空欄

甲

に入る最も適切な語句を、次のイ〜ホの中から選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 表裏にはさまれ
- ロ 堅固さに窒息し
- ハ 不確かさに幻滅し
- ニ 自然さにだまされ
- ホ 流動化に巻き込まれ
- ヘ 特異性に寄り切られ

問五

傍線部2「そんな建築」とは、どのような建築のことか。それを説明している最も適切なものを、次のイ〜ホの中から選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 現実世界を越えて、ある特定の世界に辿り着くことができると、見る人に信じさせるような建築。
- ロ 現実世界の向こう側に別の理想世界があるという感覚を喚起する、物理的環境を整えたような建築。
- ハ 眼の前にある世界がそう見えている世界ではなく、別の世界だということを感得させるような建築。
- ニ 眼の前にある世界とは別の世界があると実感できる瞬間を、絶え間なく感じさせてくれるような建築。
- ホ 眼の前にある世界が建築家の想像を超えたものであることを、救いとして提示してくれるような建築。

問六

空欄

乙

に入る最も適切な語句を、次のイ〜ホの中から選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 現実と本質の抽出
- ロ 現実と本質の差分
- ハ 現実と本質の境界条件
- ニ 具体と抽象の交点
- ホ 具体と抽象の定量化
- ヘ 具体と抽象の延長線上

問七

傍線部3「モダニズムの建築」とあるが、その特徴はどのようなことにあると筆者は考えているのか。それを説明している最も適切なものを、次のイ〜ホの中から選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 神の視点に立って人間の視点では見えない全体が構成されていること。
- ロ 構造力学的な合理性に基づいて個々の組織構成が選択されていること。
- ハ 見ですぐにその建築の本質が理解できるように進化し発展してきたこと。
- ニ 全体の組織構成と構造システムが読み取るべき謎として提示されていること。
- ホ いろいろな相の重なりを省略せずに捉えなければ本質の理解が困難であること。

問八

傍線部4「本来は神の視点ではじめて見えるものが、人間の視点から見えない」とあるが、どういうことか。それを説明している最も適切なものを、次のイ〜ホの中から選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 抽象的な建築の意味を、建築的トレーニングを受けた人間が理解できるように作られるということ。
- ロ 元来肉眼では見えない建築の組織構成や構造が、人間の眼にもよくわかるように作られるということ。
- ハ 神の眼からみえる建築の本質を、モダニズムを志向する建築家が理解できるように作られるということ。
- ニ 頭のなかで想像するしかない建築の構造などを、神業的に人間が再構築できるように作られるということ。
- ホ 鳥瞰的な視点からでもみることができない建築の理想世界が、人間も簡単に想像できるように作られるということ。

問九 傍線部5「建築写真は、具体としてではなく、抽象として建築を写そうと努めてきた」とあるが、どういうことか。それを説明している最も適切なものを、次のイ〜ホの中から選び、その解答欄にマークせよ。

イ 建築写真は人間の眼で見ることができ、建築の表面を写すのみにとどまらず、肉眼では見ることでないすぐ裏側に存在する本質を的確に捉えるために努力してきた、ということ。

ロ 建築写真は比較的簡単に写し取ることができる建築の意匠に焦点を当てるだけにとどまらず、見えにくい建築物の根底に流れる特異性を確実に写し取ろうと努力してきた、ということ。

ハ 建築写真は人間が直感的に理解できるデザインを忠実に写し取るだけにとどまらず、建築家の複雑な設計意図を簡略化することによってわかりやすく写し取る努力をしてきた、ということ。

ニ 建築写真は建築の見た目の色や形、光と影のコントラストなどの美しさを的確に捉えるのみにとどまらず、建築が本来的にもっている機能美に迫ることを主目的に努力してきた、ということ。

ホ 建築写真は人間のありふれた視点から建築構造物を撮影するのみにとどまらず、人間の眼による認識漏れが生じやすい建築構造物の柔軟性と堅牢性を撮り逃すまいと努力してきた、ということ。

問十 傍線部6「ぼくのところで作る建築には、本質というものが無い」とあるが、それはどうしてか。それを説明している最も適切なものを、次のイ〜ホの中から選び、その解答欄にマークせよ。

イ 建築の表層としてのいろいろな相を個々に捉えることは可能であるとしても、建築の本質に迫ることは困難であると考えているから。

ロ 客観的現実の存在が疑われる状況においては、現実から抽象されることでしか知れ得ない本質の存在もまた疑われざるを得ないから。

ハ 現実のすぐ裏側に存在する理想世界にこそ本質があるとすれば、建築を作る現実世界のなかには本質として捉えられるものはあり得ないから。

ニ 眼に見える情景は一つの意味に限定可能なものではなく、現実世界の奥に本質があるわけではないという考えに基づいて建築を捉えているから。

ホ 組織構成や構造システムのあり方に気をつかいながらも、常に本質を見失うことがないように配慮することは逆説的に本質がないといえるから。

問十一 空欄 丙 に入る語句として最も適切なものを、次のイ〜ホの中から選び、その解答欄にマークせよ。

イ モダン化 ロ システム化 ハ グローバル化 ニ 固定化 ホ 相対化 ヘ 抽象化

問十二 この文章における筆者の考え方に合致するもの二つを、次のイ〜ホの中から選び、その解答欄にマークせよ。

イ 自分の理想とする建築はモダニズムの建築とは異なっており、写真には撮りにくいものにならざるを得ない。

ロ 具体を抽象に接近させるのを自己目的として洗練された建築は、かえって見る人にその建築の本質が感得されにくい。

ハ 眼の前にある現実とは別の可能性を感得させることを通して、訪れる人が救いを感じるような場をつくり出すことを模索したい。

ニ 建築全体の組織構成や構造システムを見る視点を、建築を訪ねたときに見たり感じたりする視点よりも重視しなければならない。

ホ 世界の意味が流動化する瞬間に建築の課題は現れており、揺らぎを定着する写真との協力関係を築くことに新しい建築の可能性がある。

ヘ 現実にながらそのすぐ裏に別の世界を感じて救われるような感覚の提示を、モダニズム的な理想として受け継ぎつつ追究すべきである。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

小一条左大将清時卿の六代にあたりにて、宗形宮内卿師綱といふ人ありけり。白河院に仕へけるが、させる才幹はなかりけれども、ひとへに奉公をさきとして、私をかへりみぬ忠臣なるにて、近く召しつかはれけり。そのしるしにやありけむ、陸奥守になされにければ、かの国に下りて、検注を行ひけるに、信夫の郡司にて、大庄司季春といふもの、これを妨げけり。国司、宣旨を帯して、押へてとげむとするほどに、季春をせきとどめむがために、こころみに兵むかふるあひだ、合戦に及びて、国司方に人あまたうたれにけり。

国司、大きにいきなりをなして、ことの由を在国司基衡にふれけり。このこと、おどしにこそせさせたりけれ。

A の、これほどたくて、たたかひすべしとまで思はざりければ、B さわぎて、C をよびて、「いか

がすべき」といひあひけるに、「主命によりて、宣旨をかへりみず、一矢は射候ひぬ。このうへは、いかにも違勅の

れ候ふべきにあらず。季春が頸を切りて、はやくぞ国司の心はしづまり給はむなれば、われは知らず顔にて、季春が一

向とがになして、切りて、身を安くし給ふべし」といひければ、まことに、このほかは平らぐべき力なくおぼえて、歎

きながら、国司の返事に申しけるは、例なき検注を行ふにつきて、季春、ことのやうを申し述べはかりにこそ、存じ

候ひつれ、かくほどの狼藉出で来ること、申してあまりあり、ことに恐れ思ひ給へり、基衡、つゆ知らず及び侍れば、

早く検見をたまはりて、季春が頸を切りて、奉るべきむね申しける。

かくは聞えつ。つくづく、これを案するに、季春、代々伝はれる後見なるうへ、乳母子なり。主人の下知によて、し

いでたることゆゑ、たちまちに命を失ふこと、せちにいたましくおぼえければ、とかく案じめぐらして、わが妻女を出

し立てて、良き馬どもをさきとして、多くの金、鷲の羽、絹布やうの財物を持たせて、われは知らぬ由にて、季春が命

を乞ひうけさせむがために、国司のもとへやる。妻女、目代をかたらひて、季春がさがたく、不便なるやうを、言葉

をつくして、ひらにかれが命を乞ひうけけり。

目代、執り申すに、国司、大きに腹立ちて、「季春、国民の身にて、かくほどの僻事をし出したる。公家にそむき、

宰司あなづりて、そのとが、すでに謀反にわたる。財を奉ればとて、なだめゆるさむこと、君の聞こしめされむ、その

おそれ、はなはだ多し。人のそしり、またいくばくぞ。このこと、さらさら申すべからず」とぞいはれける。

6 昔、殷の紂の西伯をとらへたりけるに、大顛、閔天のともがら、善馬以下、宝を奉りて、ゆりにけり。これは、それ

にもよらざりければ、その妻、申しかねて帰りにけり。

そののち、検非違所の書生を、実検使にさしつかはすによりて、基衡、力及ばず。泣く泣く季春ならびに子息、舍弟

等、五人が頸を切りてけり。さてこそ、国司しづまりにけれ。

国のもものどもいひけるは、「季春が命を助けむために、国司に送るところのもの、一万両の金をさきとして、多くの

財なり。ほとんど当国の一任の土貢にもすぐれたり。これを見入れ給はず、女にもかたさらずして、つひにためしを立

て給へる国司の憲法、たとへを知らず」とぞ、D。

かかりければ、国 E なびきしたがひて、思ふさまに行ひけり。吏務の感応、前々の国司よりも、こよ

なうおもかりけり。のちに、君聞こしめして、いみじく御感ありけるとぞ。

(注) 在国司……有力な在庁官人のこと

問十三 空欄 A・B・C に入る語の組み合わせとして最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ

選び、その解答欄にマークせよ。

イ	A	季春	B	基衡	C	季春
ロ	A	基衡	B	国司	C	季春
ハ	A	季春	B	国司	C	基衡
ニ	A	兵	B	基衡	C	季春
ホ	A	国司	B	基衡	C	季春

問十四 傍線部1「給へ」、2「侍れ」、3「たまはり」の敬語の種類の組み合わせとして最も適切なものを、次のイ、

ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- | | | | |
|---|------|------|------|
| イ | 1 尊敬 | 2 丁寧 | 3 謙譲 |
| ロ | 1 尊敬 | 2 謙譲 | 3 尊敬 |
| ハ | 1 尊敬 | 2 謙譲 | 3 謙譲 |
| ニ | 1 謙譲 | 2 丁寧 | 3 謙譲 |
| ホ | 1 謙譲 | 2 謙譲 | 3 尊敬 |

問十五 傍線部4「妻女、目代をかたらひて、季春がさがりがたく、不便なるやうを、言葉をつくして、ひらにかれが命を乞ひうけり」の解釈として最も適切なものを、次のイ、ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 基衡の妻女は目代に頼み込んで、季春が無実であつて、気の毒であることを、言葉を尽くして訴え、ひたすら季春の赦免を願った。

ロ 季春の妻女は目代に頼み込んで、夫の季春と別れがたく、夫があわれであることを、言葉を尽くして訴え、ひたすら季春の赦免を願った。

ハ 基衡の妻女は目代に頼み込んで、基衡が季春を手放しがたく、また彼が欠くべからざる人物であることを、言葉を尽くして訴え、ひたすら季春の赦免を願った。

ニ 季春の妻女は目代に頼み込んで、季春が基衡のもとを離れがたく、基衡があわれであると思っていることを、言葉を尽くして訴え、ひたすら季春の赦免を願った。

ホ 基衡の妻女は目代に頼み込んで、季春が政治に欠かせない人物であり、殺したならば国司にとって損であると、言葉を尽くして訴え、ひたすら季春の赦免を願った。

問十六 傍線部5「このこと、さらさら申すべからず」の解釈として最も適切なものを、次のイ、ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ このことをけつして他人に言つてはならない。

ロ このことを聞き入れることはまったくできない。

ハ このことをけつして基衡に漏らしてはならない。

ニ このことを私に対して二度と口に出してはならない。

ホ このことを帝に申し上げることがまったくできない。

問十七 空欄 D に入る語として最も適切なものを、次のイ、ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ いみきらひける

ロ くいなげさける

ハ おぢおそれける

ニ なきかなしみける

ホ はめののしりける

問十八 空欄 E に入る語として最も適切なものを、次のイ、ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ なほ

ロ あるいは

ハ そもそも

ニ されども

ホ かししながら

問十九 本文に書かれている内容と合うものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 基衡は、季春の潔さを称賛した。

ロ 国司は、本当は季春を許したいと思っていた。

ハ 基衡は、あわよくば国司を討ってしまおうと思っていた。

ニ 国司は、特に能力のある人間とは評価されていなかった。

ホ 基衡は、事件が国司の命令によって起こされたことを実はよく知っていた。

問二十 本文は、『十訓抄』という説話集に収められている。次のイ～ホの中から説話集を一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 無名抄 ロ 狭衣物語 ハ 日本書紀 ニ 保元物語 ホ 日本霊異記

問二十一 傍線部6「昔、殷の紂の西伯をとらへたりけるに、大顛、閔夭のともがら、善馬以下、宝を奉りて、ゆりにけり」は、『史記』の「殷本紀」に拠っている。殷の紂王は酒と女を好んでいわゆる酒池肉林の宴に耽り、諸侯のうちには背く者も出てきた。紂王は重い刑罰をさらに重くし炮烙の刑（火の上に油を塗った銅の棒を渡しその上を罪人に歩かせる刑）を設けた。殷には、西伯昌（後の周の文王）・九侯・鄂侯という三人の大臣がいたが、紂王は九侯の娘が自分になびかなかつたために娘と九侯を殺し、それを諫めた鄂侯も殺してしまった。そののちのことについて記したのが、以下の文章である。これを読んで、あとの（1）（2）の問いに答えよ（設問の都合上、本文を改め、送り仮名を省いた箇所がある）。

西伯昌聞之、竊歎。崇侯虎知之、以告紂。紂囚西伯。里。西伯之臣閔夭之徒、求美女・奇物・善馬、以獻紂。紂乃敕西伯。西伯出而獻洛西之地、以請除炮烙之刑。紂乃許之、賜弓矢斧鉞、使得征伐。而用費中、為政。費中善諛、好利。殷人親紂。又用惡來。惡來善毀讒。諸侯以此益疎。西伯歸、乃陰修德、行善。諸侯多叛紂。而往歸西伯。西伯滋大。紂由是稍失權。重王子比干諫、

F 聴。

（注） 崇侯虎……人名 毀讒……そしり讒言すること

（1） 空欄 F に入る語として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 可 ロ 多 ハ 少 ニ 勿 ホ 弗

（2） 本文に書かれている内容と合うものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 紂王は、西伯に洛西の地を与え、武力を授けた。

ロ 西伯は、彼を投獄した紂王のことを深く恨んでいた。

ハ 諸侯は、悪政を行った紂王に背いてふたたび西伯に従った。

ニ 西伯は、紂王に炮烙の刑の廃止を願い、紂王はそれをかなえた。

ホ 紂王は、西伯をいったんは赦したが、すぐに討伐しようとした。